

# 月色溺愛

深緑 風龍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

chapter 2の8―F章で、簪が書いたBL同人誌。それを小説にしちやつた物語。

冬木市、月海原学園にてとある男の娘が、年上の男の娘に惚れて、恋の葛藤をする羽目に。

その恋は成就するのか……………。

# 目次

抑えきれない恋の欲望

—  
1



# 抑えきれない恋の欲望

未来「最近、ガルツチの様子がおかしいんだけど……。」

白野「ちよつと待って、突拍子過ぎて話が見えないわ。」

昼休み、未来に相談に乗っているのは、ガルツチと同じ高校2年生で同じクラスの白野凜だった。白野凜もまた、男性からも女性からも人気はあり、ガルツチとも仲がいい女性でもあった。

未来「んじやあ言うけど、ここんとこ最近、ガルツチが何か無理している気がするんだ。」

白野「ガルツチが？確かに運動部に参加しまくって、全国優勝しているのは知っているわ。無理をしているのは分かるけど、そこまで？」

未来「あのね、運動で無理をしているんじやなくて、僕に内緒で必死に隠し通そうとしてるらしいんだ。最初は顔を見せると真っ赤になってるから、照れているのか、熱があるのかと思っていたけど、ここのとこ何かがおかしいんだ。」

白野「そういえば、授業中に何かと上の空だったし、さつきだって真剣を持って練習用の人形を斬って斬って斬りまくっていたしね。しかも、その時小声で煩惱退散って何

「回も言ってたよ?」

「明らかにおかしいと思っていたのだが、様々なところから視線を感じたのか、この話が終わった。何しろ……………」

「なあなあ、今度は白野に声かけてるそうぞ。」

「何っ!?あの鉄の女とも呼ばれてる、あの白野が!」

「俺の白野に手を出すとは……………。だが、あの顔立ち、綺麗だよなあ……………」

「うんうん、それに未来って会長さんでしょ?しかも文武両道だもん。」

「いや、それだとガルツチもでしょ?」

「そういえば、お前のクラスにガルツチがいたな。」

「そうそう、そのガルツチなんだが、なんだか様子がおかしいんだ。」

「え?年下の女の子にモテモテのガルツチが?」

「ああ、何でも授業中に窓の外で黄昏れてるわ、昼休みが始まれば真剣を持って練習用の人形を斬りまくっていたそうぞ?」

「いやいや、ただ単にイライラしてるだけじゃあねえの?」

「そうでもないんだ、俺の推測だけど……………」

「「うんうん。」」



白野「女の子なのかな？」

未来「うーん、だったら何でガルツチは、僕を見て赤くするんだろ……………」

白野「あー、確かに……………」

未来「ねえ白野、君ってガルツチの友人でしょ？何とか相談して、教えてくれないかな？放課後でもいいから。」

そう言うと、白野はグツと親指を立てると、丁度昼休みのチャイムが終わった。

放課後

ガルツチ side

ガルツチ「はあ……………はあ……………」

駄目だ……………。これだけ斬ってるのに、未来先輩の事を思うと……………心臓が高鳴ってくる……………。

分かってる、分かってるよ！だけど、男同士の恋愛なんて、有り得ないよ！そもそも

そんな事があつたら、皆だつて引かれるつてのに………………。何で………………。何でこんなに求めたくなるんだ!!!

抑えなきや……………、未来先輩の想いを……………、じゃないと

……………、僕……………、僕!!

白野「ガルツチさん。」

ガルツチ「ツ!」

白野「ちよ、ちよつと!?!それ真剣なんだから振り回さないで!!」

ガルツチ「あ、ご……………ごめん。白野……………」

ヤバい、動揺してた……………。危うく白野を斬っちゃうところだったよ

……………。

白野「そんなことより、大丈夫なの?」

ガルツチ「ん?何が?」

白野「君、後半の授業から全く出てなかつたよ?」

ガルツチ「え?あああああああああ……………」

なんてこつた!?!何やってんだよ、僕の馬鹿……………!!

白野「ねえ、本当に大丈夫?最近、様子が変だよ?」

ガルツチ「そ、そうか?」

白野「皆噂してたよ？ガルツチは、誰かに惚れ込んでいるって。」

ガルツチ「ツ!!」

嘘……………、一体どこで!?!何時見破られたんだ!?!これだけ未来先輩の想いを押し殺していったつのに……………。

白野「凄い動揺って事は……………やっぱり?」

ガルツチ「……………。」コクツ

白野「本当だったのね。それで誰なの?やっぱり、小学生の子?」

ガルツチ「……………違う。」

白野「あら意外ね、てつきりそうかと思っただけど……………。」

ガルツチ「確かに、幼女は好きだよ?ロリコンは認めてるし……………、でも違うんだ。」

白野「じゃあ、誰なの?」

ガルツチ「言えない……………、言ったら君が引くに決まってる。」

白野「え?引く?私が?」

ガルツチ「当たり前だろ、こんなの有り得ないし、あつてならない……………。なの  
に、其奴を思うと……………、顔を見ることも出来ないし……………、心臓の音が、  
僕に聞こえてしまうほど、高鳴ってしまうんだ……………。こんな、恥ずかしくて、言  
えないよ!」

白野「……………未来先輩、心配してたよ。ガルツチの様子が変だった。」  
 ガルツチ「なっ?!み、みみみ未来先輩が?!?!」

白野「ちよつと、何でそこまで……………!!?」。まさか、ガルツチ……………。」

ガルツチ「やめてっ!お願いだから、僕は別に!」

白野「……………引かないよ。」

ガルツチ「へ?」

え?引かないって、どういう?

白野「分かった途端、少し驚いたけど……………でも安心したわ。あなた、それぐら  
 い……………」

ガルツチ「ううう……………」

知られてしまった。ううん、白野だからこそ、分かってしまった。

僕が秘めてる想いを……………、その思いを押し殺していることを……………。

白野「でも、どうしよう……………。こんなの知られたら、皆パニックでしょうね。」

ガルツチ「だから隠してたんだよ……………、特に……………」

白野「分かっている。でも、未来先輩には伝えるからね。」

ガルツチ「え?ちよ、ちよつと待って!!そんな事したら——」

白野「大丈夫、未来先輩はそんなことで引かないわよ。だから、安心して。」

ガルツチ「で、でも……………」。

「ガルツチ、白野、もうそろそろ帰りなさい！それとガルツチ、鍛錬はいいが、授業忘れるなよ！ほれっ、荷物だ！」

ガルツチ「ご、ごめんなさい。エミヤ先生。」

あーもー、如何したものか……………これから如何接すればいいの？もう僕、分らない、分かないよおお……………。

side Change

次の日 昼休み

未来 side

白野 「つて事よ。」

未来 「え!？」

マジで!?!いやいや、確かに僕ガルツチには可愛がつてはいたよ?でも、え?ホントに!?

(。D。)

白野 「うん、それで未来は如何するの?」

未来 「如何するつて、そりゃあ……………」。

正直驚いたよ。まさか、ガルツチがそこまで……………。だったら、やることは一  
つ!

side change

放課後 帰りの途中

再びガルツチ side

うー……………、また集中出来なかつたあ……………。やっぱり如何しても未来先輩の事を思ってしまう……………。こんなの良くないのに……………。あーもー、僕のバカバカ!!頭では理解してるのに、何で心臓が高鳴ってくるんだよ……………。しかも魔が差したとはいえ、未来先輩が着ていた服を匂いを嗅ぎながら自慰してたなんて、こんなの変態がやることだよ!!!もう、如何すればいいんだよ!!!こんなの未来先輩に見られたら……………。

『ガチャ』

未来「お、お帰りガルツチ。」

ガルツチ「ひえ!? た、ただいま……………」

落ち着け、落ち着け……………。冷静に、冷静に。自分の想いを、煩惱を殺せ!

ガルツチ「ごめん、遅くなって。」

未来「ううん、気にしてないよ。あ、あと帰りが遅いと思って、何か買ってきたよ。」

ガルツチ「ホントにごめんね、未来先輩。」

未来「あ、そうそう。ガルツチ。明日、何か予定ある?」

ガルツチ「予定ですか？ ないですけど。」

未来「あ、丁度よかった。」

ん？ 丁度よかった？

未来「実は新都で遊園地が出来たのって、知ってる？」

ガルツチ「あー、サーヴァントランドっていう滅茶苦茶人気の高い遊園地ですか？」

未来「うん、そこでさ。一緒に行かないかなあつて思うんだけど、如何かな？」

え？ ちよつと待って？ それって……………、つまり…………… 『デート』!?

ガルツチ「ちよ、ちよつと待ってね？」

未来「うん、いいよ。」

『ドタバタドタバタドタバタ……………、ガチャ、ボタン！』

ガルツチ「ハア……………ハア……………」

オイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイ

イオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイイ!!!

え、マジで!? 未来先輩との、デートだって!? しかも、滅茶苦茶人気のサーヴァントラ

ンドに!? や、ヤバ……………。心臓がうるさいぐらい高鳴ってるよ! もう自分でも、

抑えきれないほどに……………。駄目だつてのは分かっている、でも僕は…………… 未来先

輩の事が……………、未来先輩の事が!!!

!!!

駄目だ、もつと抑え込まなきや………………。でも、チャンスだ。これはYES以外何でもない！一緒に行こう、そうしよう！

side Change

再び未来side

うわー、凄い勢いで部屋に入ったね………………。白野の言うとおり、これは本命なのかも。あ、降りてきた。

ガルツチ「いいよ、明日予定なかったから丁度よかったし。」

未来「よかった、んじやあ明日ね。」

ガルツチ「うん！」

それにしても、ここまでガルツチの鼓動が聞こえるなんて………………。それぐらい、僕  
の事を………………。

そして当日

「ようこそ、『サーヴァントランド』へ！お二人様ですね。  
未来「はい。」

「では、チケット確認しますね。ありがとうございます。それでは、ごゆっくりお楽し



未来「だ、大丈夫？」

ガルツチ「あ、危うく死にかけて。」

クローリン「うつぶ、もう駄目……………」。「バタン

ガルツチ「ランサーが死んだ!？」

未来「この人でなし!!!」

バゼット「ランサー？大丈夫ですか？一応医務室のところに連れていきましょう。」

うわー、なんか変な持ち方で運ばれていったな……………」。

ガルツチ「でも、スリリングがあつて楽しかったね。」

未来「そうだね。今度はお化け屋敷……………」つて如何したのガルツチ。」

ガルツチ「いや僕、そこ苦手……………」。

意外だな……………」、ガルツチつて何ともないと思つてたけど……………」。

未来「うーん、でもさ一緒に行く？」

ガルツチ「み、未来先輩が——」

未来「ガルツチ。今は先輩呼びはいいよ。」

ガルツチ「んじゃあ、未来……………」。行く。でも、手は離さないでね？」

未来「大丈夫だつて。」

お化け屋敷に入って数分後……………。

ガルツチ「あの、未来？」

未来「((((;。D。)))))」

な、何なのあれ!?最早怖いってレベルじゃないよ!?マジで!!!なのに、何でガルツチは怖がらないの!?

ガルツチ「もう、抜けたのですから、次……………行こう?」

未来「あ、う……………うん。((((;。D。)))))」

ガルツチ「次は……………ウォータースライダーに行こう。」

そうして、僕らは閉園するまで遊び尽くした。そして、最後に観覧車に乗ったとき。

ガルツチ「あー、久しぶりに疲れた。」

未来「でも、楽しかったね。」

ガルツチ「うん。」

未来「でもガルツチ、お化け屋敷苦手って言った割には、何で怖くなかったの？」

ガルツチ「え？何でって、そりゃあ……。未来先輩と、一緒だったからかな？」

未来「そつか……………」。

ガルツチ「また、ここで遊びたいなあ……………」。

未来「うん。その時は、今度は白野とか呼んでね。」

ガルツチ「うん。次に来る日が、楽しみだな。」

side Change

ガルツチ side

ガルツチ「あちゃー……………、すっかり暗くなっちゃったな……………」。

まあ、仕方ないか。未来先輩と一緒に、遊園地で楽しみまくってたし。ってあれ？

ガルツチ「未来先輩？何処に？」

未来「うーん、とりあえず家に鍵は？」

ガルツチ「かけたよ？」

未来「そうか、ならいいよ。」

ガルツチ「先輩？」

何で鍵かけたとか、言い出したんだろ？でも、何で僕を引っ張って……………？

未来「着いた……………」

ガルツチ「ここって……………、え!？」

え、未来先輩が連れてきた場所って……………いやいや、何で!?何で『ラブホテ

ル』!？」

ガルツチ「あの、未来先輩!？」

え、何で戸惑いなく入っていったの!?ちよ、ねえ!？」

『ガチャ、バタン。』

未来「よつと。」

ガルツチ「ファ!？」

お、お姫様抱っこ!?!いやホントに如何したんですか!?!未来先輩!？」

未来「それっ!？」

ガルツチ「うわっ!？」

『ば、ふっ!』

え?え?全く状況が読めないんだけど?何で?何で未来先輩、僕を?って近い近い近い近い近い!!?しかもこれ、押し倒されてる!!?

ガルツチ「あの……………、先輩?」

未来「何?」

ガルツチ「これって……………一体……………」。

未来「押し倒してるだけだけ?」

そういう問題じゃないよ!!って待つて待つて!?何でそんなに見てるの!?あああああ……………、やめて……………、お願いだから……………そんなに見つめてたら……………

……………見つめてたら……………おかしくなっちゃう……………。

未来「白野から聞いたよ。ガルツチ、そこまで僕の事を……………」。

ガルツチ「いや……………、僕は……………その……………えーっと……………」。

……………」。

未来「恥ずかしかったんだろ?こんなの、絶対あり得ないって。」

ガルツチ「うん……………」。

未来「引いて嫌われるって、思われたんだろ?」



未来「ガルツチ、ごめんね。」

ガルツチ「え？」

何で、未来先輩が謝るんだ？

未来「ホントは僕も、君のことが好きなんだ。誰よりも、君が。」

ガルツチ「先輩……………」。

未来「でも言えなかった。理由は、君と同じ。だから、ずっと秘めていたんだ……………」。

ガルツチ「せ……………先輩……………」。

未来「それが、まさかガルツチを苦しめる事になるなんて……………、先輩として、情けない！」

……………そっか、先輩……………いや未来も、同じ気持ちだったんだ……………。一緒に居られたらなって、ずっとずっと……………。

あれ？何で、何で僕……………泣いて……………？嬉しい筈なのに……………凄く嬉しい筈なのに……………涙が……………。

未来「ガルツチ、ごめんね。『大好きだ』！」

ガルツチ「うっ……………未来う……………、僕も……………、僕も『大好き』だよ……………」。

未来「ずっと、ずっと一緒にいよう！」

ガルツチ「うんっ！『愛してる』よ、未来っ!!」

もう押し殺さなくていいんだ。未来も、僕と一緒に気持ちだつて……。ホントに……、よかつた……。

未来「落ち着いた？ガルツチ。」

ガルツチ「うん、ごめんね未来。心配かけちゃって。」

未来「気にしないで、確かに男同士なんて、普通あり得ないから。」

ガルツチ「そうだね……………でもラブホテルに入ったって事は……………」

未来「……………うん、そう言うことだね。僕、君が欲しい。滅茶苦茶にしたいくて、おかしくしたいぐらい、君の身体が欲しい。」

ガルツチ「……………いいよ、身も心も魂も、君にあげる。」

未来「脱がすよ。」

そしてそのまま、未来に脱がされると、僕の唇を重ね合わせ、舌まで入れてきた。入れてくるだけで、また心臓が高鳴り、身体が暑くなってきた……………。

未来「ハア……………ハア……………、キスしただけで、もうこんな顔に……………」

ガルツチ「そりゃあ、ずっと想いをつ、押し殺してつ、いたんだから……………、こんな顔してつ、当然だよ……………」

未来「そうだね、これも勃ってるし。」

ガルツチ「ひゃあぁ!♡//>//>//」

乳首を触られただけで、快感が身体中に巡ってきた。

未来「もしかして、乳首に触られただけで気持ち良かったの?」

ガルツチ「う、うん……………。//>//>//>//>//」

未来「可愛い顔して、エッチなんだね……。」

そして未来は、僕の乳首を弄くったり、舐めたり、時には吸われたりすると、ますます気持ち良くなり、もっと弄って欲しくなってきた。ただ喘がないように、必死に我慢するも、巡り巡る快樂が身体中に訴え、ますます感じやすくなってきた。

未来「フフツ、必死に喘ぐのを我慢してるガルツチも可愛い。」

乳首を弄くるのをやめた途端、一気に切なくなってきた。生殺しされたのか、僕の息も荒れ、もつといじめて欲しいと、身体が訴えてきた。そしてそのまま袴と下着をを脱がされ、大きくなった〇〇〇〇を見ていた。

未来「もうこんなに大きくなって、しかも先走り汗を出しちゃって……。そんなに、僕に弄くられるのが好きなんだね、Mのガルツチくん。」

ガルツチ「うあ!!♡♡/////////////////////」

未来「うわっ!?まだ弄ってないのに、ビクツって跳ねたね。見た目によらず、弄って欲しいドMさんだなんて。」

それが分かかってしまうと、僕の〇〇〇を弄り始め、まるで待っていたかのように、背筋を伸ばしてきた。しかも未来は、激しくしごいていて、今まで溜まっていた快感が達しようとしていた。

ガルツチ「未来っ！もう僕、イきそうっ！」



未来「いいよ。」

そのまま僕と未来は、一緒にシャワーを浴びながら、色々といじられた。もう僕の身体は、未来に恋に落ちてから出来上がっていたのだ。快樂と陶酔、悅樂が僕を満たしていき、脳内も完全に快樂によって支配されてしまった。未来は右の人差し指を舐めて唾液を付着させて、丁寧に菊門へと突っ込んできた。

未来「ん？なんだか凄く感じているけど……………、もしかしてガルツチ。」

ガルツチ「ふえ？／＼／＼／＼／＼／＼／」

未来「何かの道具を使った？『アナルビーズ』とか。」

ガルツチ「え、えーっと……………。／＼／＼／＼／＼／＼／／／／／」

未来「言わないと、お仕置きだよ？」

すると菊門の中をかき回し始めたのか、またいきそうになってきた。このままお仕置きされてもよかったが、あえて答えた。

ガルツチ「未来がいなかった時、未来に弄られるのを想像しながら、ずっと、アナニーしてたんだ。♡／＼／＼／＼／＼／＼／／」

未来「そうなんだ、僕をオカズにするなんて、悪い後輩だねえ。そう言う後輩には、お仕置きしないと。」

ガルツチ「それって……………、もしかして？」

未来「悪い後輩専用のローターだよ。これで、君をお仕置きするよ。」  
ガルツチ「待って、それ防水だよな？」

未来「大丈夫、お風呂場でもちやんと動くから、心配しなくてもいいよ。」

すると、少し大きめのローターが、僕の菊門の中に入れると、そのままスイッチを押された。途端に快感が脳にまで刺激し、もっと欲しくなった。

ガルツチ「ああああ!!♡♡み……………、未来うう!!♡♡♡♡」

未来「何?止めて欲しい?」

ガルツチ「ううんっ、もっと欲しいっ!♡♡このドMで悪い後輩のアナルに、もっとお仕置きして下さい!!♡♡♡♡」

未来「いいねえ、自分からお仕置きのおねだりするなんて。んじやドMで素直な後輩には、特別に最大まであげてあげる。」

未来が持っているコントローラーのパワーを最大にするや否や、一気に快感が全身に巡ってきた。あまりの気持ちよさで、僕は一気にイってしまった、普通ならもう出ないはずの精液が、またいっぱい出てきた。何度も何度もイって、たまりに溜まった精液をこれでもかというぐらいいにしまくった。

そして……………。

未来 side

未来「はい、お仕置き終わり。って、大丈夫ガルツチ？」

ガルツチ「あひやあああああああ……………、ぎもちいいいい……………。」

♡♡♡♡♡♡♡♡

未来「……………ちよつと、やり過ぎたかな？」

いやでも、正直ガルツチから頼み込むなんて思わなかったよ。自分からお仕置きを要

求するなんて……………、そんなに僕が欲しかったのかな？しかも、ガルツチのお尻から体液が流れてるし……………。もう僕も、限界かも……………。こんなにイキまくったガルツチの顔を見ていたら、入れたくなってきた。それに、まさかガルツチがDMだったなんて、予想しなかったよ。

未来「ガルツチ？ねえ、大丈夫？」

ガルツチ「ああああ……………、ハア……………、ハア……………、ちよつと……………待って……………。少し、落ち着かせて……………」

未来「うん。」

それにしても、ガルツチって結構絶倫なんだね……………。こんなに出生してるのに、普通ならもうしおれてる筈なのに、まだ元気になってる。とりあえず僕は、お互い体を洗い、シャワーで流し、裸のままベットに向かつて寝つ転がった。

ガルツチ「アハハ、僕の性癖バレちゃったね。♡ちよつと引いた？♡」

未来「ちよつと、引いたかな？」

ガルツチ「だよね。でも、それだけ僕は、未来が欲しかった。我慢し続けた僕に、お仕置きして欲しかった。身も心も、未来好みにされて、未来のものになりたかったんだ。」

未来「もう、ホントに可愛いなあ、ガルツチ。」



わいたいんだ。」

ガルツチ「未来が言うんなら、いいよ。♡それと、耳を舐めてくれないかなあ?♡」

未来「囁くだけじゃあ、物足りないの?」

ガルツチ「うん。我が儘なのは分かってるけど、いい?♡」

未来「いいよ、耳元まで犯してあげる。♡」

僕はそのまま、ガルツチの右耳の方を甘噛みし、吸いつき始めると、漸くガルツチが喘ぎ始めた。その喘ぎが、僕の射精欲を高めていき、腰を振るのを早めていった。

ガルツチ「んあッ、ふ、ひ、くううう!♡未来っ、お願いっ、激しくしてっ!♡♡♡

♡♡」

たったその一言で、僕の射精欲が急増していき、全力で腰を振った。ガルツチの中も、僕の○○○をキツく締め付け、いっぱい出させようとしていた。

そして、僕がいきそうなのが分かると、ガルツチが声をかけてきた。

ガルツチ「出そう?♡」

未来「うん、いっぱいっ、いっぱい出して、あげるね。♡♡」

そして、そのままガルツチの直腸の最奥にて、たまりに溜まった精液をぶちまけていった。

ガルツチ「あああああ………。♡未来の精液が、いっぱい流れてくるうう。♡♡♡



ガルツチ s i d e

ガルツチ「凄いな……………、未来の精液……………。一瞬で、妊婦みたいにお腹膨れ上がっちゃった。」

それにしても、セックスが終わったのが分かるとう理性が戻るって、僕どんな体質してるんだ？それより……………、少し未来先輩に無理させちゃったなあ……………。でも、気持ち良かったなあ……………。とりあえず、鞆に入ってる水のペットボトルを取ってきて、少しずつ未来に注いでから、僕も飲んで……………。つと。

ガルツチ「よく考えると、これ間接キスだな……………。」

それに、こんなんじや喉を潤しても何か満足しないな……………。もう水も少ししかない

けど……………、口移ししてもいいよね？

ガルツチ「んじゃ、早速……………」

僕は残り少ない水を飲み干し、未来の唇に重ね合わせた後、水を注いでいった。まるで起きてるかのようには、ゴクゴクと飲んでいき、最後には僕の口の中に舌が入ってきて、嘗め回していった。

やばい、未来先輩の寝顔可愛すぎる。でも、僕もそろそろ眠くなってきたし、未来先輩の胸元で、ぐっすり眠ろう……………。

ガルツチ「……………未来先輩の鼓動……………、僕が聞こえるほど……………打ってる。」  
僕と同じくらい、ゆっくりと……………そして大きく……………『ドクン……………ドクン……………』って、鳴っている。

未来先輩……………、ううん、未来……………

ガルツチ「愛してるよ、未来。」

それから……………。

「なあガルツチ。」

ガルツチ「何？」

「お前、好きな人が出来たってホントか!？」

ガルツチ「まあね。」

「嘘お！」

「マジで？」

「んじゃあさ、やったのか？」

ガルツチ「そ……………そりゃあ、うん。」

「うわつ、羨ましい!どこで!?!デートとかした?」

ガルツチ「おいおい、頼むからそれ以上はがつつくな。僕はそろそろ、屋上に行かないと駄目だし。」

「おい待て、逃げる……………ん?何で弁当3つあんの?」

ガルツチ「え？」

「まさかガルツチ、屋上で3つ全部喰う気か？」

「いやいや、でも確かにガルツチって結構運動してるしな。」

「でも、筋肉付いてないのに、太らないし、ちよつと羨ましいな。」

ガルツチ「何言ってるんだよ、一つは僕ので二つ目は白野のぶん。」

「じゃあさ、3つ目は誰の………っていねえ!？」

屋上

未来「お、ガルツチ。待ってたよ。」

ガルツチ「未来先輩……………、もう弁当忘れてどうすんだよ。」

白野「もう、慌てん坊なんだから。」

ホントにそうだよ、困ったもんだなあ……………。

未来「お、相変わらず凄いな。ガルツチが作ってくれた弁当。」

白野「そうね、私のは……………キター（・▽・）ー！！麻婆豆腐ありがとう、ガルツチ。」

ガルツチ「白野好みの辛さにして置いたよ。僕のもあるけどね。」

未来「そういうえば、ガルツチのつて二段式だったな。こっちもこっちで美味しそうだし。」

んで、下は……………え？これって。」

ガルツチ「超究極激辛四川風麻婆豆腐だ。」

このガーネットのように赤く、グツグツとマグマのようになる汁、そしてそこに煌びやかに光る豆腐。まさしく、究極まで極めた麻婆豆腐と言っても過言では無い。かつて

この麻婆豆腐を作ろうと必死に頑張っていた神父が求めていた麻婆豆腐。僕が先に頂くでしょう。

白野「羨ましいなあ……………」

ガルツチ「未来先輩は……………」

未来「ごめん、さすがに手は出せないや。」

ガルツチ「でしようね……………」

白野「未来先輩も食べればいいのに、美味しいと思うよ？」

ガルツチ「いや実はさ、この超究極激辛四川風麻婆豆腐を作ったの、今のところ僕だけなんだ。」

白野「そうなの!？」

未来「え、じゃあさ、ガルツチが世界初の『麻婆豆腐を極めし者』って事じゃないか!？」

ガルツチ「そう言うことだね。とりあえず、冷めないうちに、いただこうか。」

未来「そうだな。んじゃ。」

3人「いただきます！」

早速麻婆豆腐から平らげて……………カプツ。

ガルツチ「!!!」

未来「ど……………どう？」

白野「凄い形相だけど、如何なの？」

如何なのだ？そんなの決まってる。

ガルツチ「まさしく、まさしく！麻婆の中でも最も辛く、そしてこの複雑骨折をしたときの痛みが一気に身体中に染み渡り、そしてその苦しみの末に味わえる至高かつ究極で最高の旨さ。『超究極<sup>マ</sup>激辛<sup>ホ</sup>四川<sup>ド</sup>風<sup>ウ</sup>麻<sup>フ</sup>婆<sup>ア</sup>豆腐<sup>ア</sup>』はここにあると、神父に伝えたい!!」

未来「そこまでなのか……………」

白野「私もいい？」

ガルツチ「どうぞ。」

「おい、あれ見ろ！」

「あれって、未来先輩と白野だよな。」

「んじゃあ、ガルツチの好きな人って、白野か!？」

「おのれガルツチ！俺達の知らない間に、白野を攻略しやがって……………」

「いや待て、様子が違うぞ?」

未来「なあ、ガルツチ。」

ガルツチ「ん?」

未来「はい、あーん。」

「何イイイ!?!」

「未来先輩が、ガルツチにあーんしてるだど?!」

「いやまって、未来先輩って男でしょ?そこは白野の筈なのに。何で?」

ガルツチ「あーむっ。♡」

未来「自分で作った料理でも、僕があげると美味しい?」

ガルツチ「そりゃあ勿論だよ。」

「嘘だろ!?!あのガルツチが、未来先輩のあーんを受け入れたぞ?!」

「いやいや、多分気のせいだ!」

「そ、そもそも、未来先輩があーんするなんて、稀な事よ!?!」

「……………白野を無視して、いいつてのか?」

ガルツチ「んじゃ、今度は僕がする番。って、その前に……………」

ハア、まさかとは思ってたけど……………」

ガルツチ「おいドアのところ覗いてるお前ら!何覗きしてやがる!!!」

「「「やべつ、逃げるんだよ〜!!!」」」

全く、覗き見とは……困った連中だな。後で激辛麻婆豆腐をぶつけてやろう。ガルツチ「もう見られないように、紙で隠して、鍵を掛けてつと。」

んじゃ、続きをしますか。

白野「誰か覗き見してた？」

ガルツチ「うん。しつこいんだもん、彼奴ら。」

未来「それで時間を食っちゃったって事だな。」

ガルツチ「そうそう、って事で未来先輩。あーん。」

未来「あーむっ。」

ガルツチ「どうかかな？」

未来「凄く美味しいよ。」

ガルツチ「よかった。」

白野「もう、随分出来上がってるね。二人とも。」

確かに、今まで押し殺していた僕が恥ずかしくなってきたよ。

「出来上がってる? どういう事?」

「分かんない。かんちゃん、オーちゃん、フララン、こいこい、イリリン。もう少し、

近付こう。」

「『了解。』』』』」

未来「(ガルツチ。)」

ガルツチ「(分かっている、でも今はスルーしよう。白野もいいね?)」

白野「(うん。)それで、初デートは如何だった?二人とも。」

未来「楽しかったよ、凄くね。」

ガルツチ「うん、それで次来るときは白野も連れて行こうって決めたんだ。」

白野「そうなんだ、んじゃあ今度一緒に行くときは、私も誘ってね。」

未来ガル「いいよ。」

約束だもんな、ちゃんと守ってやらないと。

こいし「もしかして、二人とも白野先輩と?」

イリヤ「もしかしたら、そうかも知れないわ。」

フラン「待って、だったらなんで白野先輩が、ガルツチ先輩と未来先輩に『初デート』なんて言ったんだろう?」

本音「まさか……………まさかのまさか……………、ガルツチ先輩と未来先輩って……………」

そう言う関係じゃあないの？」

オーフィス「あり得ない。だって、未来先輩、ガルツチ先輩、男だろう？」  
簪「そ、そうよ。そんなのあり得ないって。」

あー、これは気付いてる様子だな。でも確証は無い、だったら…………。

ガルツチ「未来先輩。」

未来「ん？何……………っん。♡」

ズキユウウン  
!!!!!!!!!!

白野「や……………やった!!」

未来「んっ、ガルツチ……………」

ガルツチ「未来う……………」  
♡♡

フラン「嘘!? ガルツチ先輩が、未来先輩にキスした!？」

こいし「さっすがガルツチ先輩!!!」

イリヤ「私達に出来ないことを!」

簪「平然とやってのける!!」

オーフィス「そこに痺れるっ!」

本音「憧れるううう!!!」

未来ガル「はい、覗き見さんみつけ。」

「「「「「あ。」」」」」

白野「やつぱり、居たのね。」

本音「えへへへ、バレちゃった。」

ガルツチ「んで、君達なんで僕らを覗き見してたんだ?」

何でも、本音とオーフィス、簪は未来先輩のファンで、フラン、こいし、イリヤは僕のファンのように、最近僕らの関係が気になった為に、僕らが弁当を食べてる最中にこっそりと隠れて、どんな関係なのか調べていたらしい。因みに、6人とも中学2年生のようだ。

フラン「それで、お聞きしたいのですが……………。ガルツチ先輩、未来先輩とはど

う言う関係ですか？」

ガルツチ「どうってそりやあ勿論……………なあ？」

未来「うん、一緒に住んでる仲だし、弁当だつて一緒に食べてるし…………。」

本音「一緒に住んでる!?!同居って事ですか!?!」

ガルツチ「まあね。」

簪「でも、それだけじゃ分かりません!だったら、何でガルツチ先輩は、未来先輩に

……………キスしたんですか!?!」

そこ聞いてきたか。

ガルツチ「うーん……………、他のみんなに言わないって、約束出来るか?」

こいし「つて事は、それぐらい言われたくない、深い関係って事ですね!?!」

イリヤ「いいません!先輩方の秘密、絶対守ります!」

オーフィス「我々、秘密守る!」

ガルツチ「んじゃあ言うけど……………。僕と未来先輩……………ううん、未来とは

……………。

『恋人兼愛人関係』なんだ。」

言っちゃった………………。まだ歳間も行かない女の子たちに、言っちゃったよ。

こいし「やっぱり……………、そうだと思った。」

未来ガル「え？」

こいし「実は私達、探偵部つてのをやってて、ずっと貴方達を見ていたの。」

白野「あ、そう言えば未来先輩のファンとガルツチのファンが手を組んで作つたと言われてる探偵部があるって聞いたことあつたね。」

未来「んじゃあ……………。」

ガルツチ「つて事は……………。」

未来ガル「僕らがラブホに入ったところも？」

6人「バッチリ見てました！」

未来「……………マジかよ。( ; )」

ガルツチ「……………」

オイオイオイオイ！んじやあ最初からバレてたって事じやあないか！恥ずかしい！

??「ウフフ、6人とも。合格よ。」

ガルツチ「え、清姫先生!？」

清姫「これで貴方達も、立派な探偵部員よ。」

6人「やったー!」

未来「あの、清姫先生。これは……………」

清姫「実は、私が探偵部を作った張本人なの。きつかけはガルツチさんの嘘。絶対誰かを求めているに違いないって思って、この6人に頼んで依頼させたの。」

白野「アハハハ、清姫先生のせいだったんですね。」

清姫「それにしても、やっと清々しい顔になりましたね。ガルツチさん。」

ガルツチ「……………確かに、そうだね。未来と一緒にデートし、そしてお互い抱き合っ  
て初めて分かった。未来もまた、僕のが好きだって事。今まで隠し通そうとしてた  
僕が、馬鹿だった。でも、清姫先生。これだけは真実です。怖かった。男同士の恋愛を  
持っている僕に、皆に知られたくなかった。バレたらと思うと、恐くて恐くて……………、独  
りになるんじゃないかと……………」

清姫「……………でも今は、それも嘘に変わったよね。」

ガルツチ「はい。清姫先生は、嘘を許せないのは、重々承知です。不安は残りますが、いつかは自分の口で、僕と未来の関係を、伝えようと思います。」

清姫「……………嘘は無いね？貴方の場合、ほとんどが嘘に見えてしまうけど。」

ガルツチ「僕は偽り続けますが、この意志とこの思いは、決して嘘を伝えません！」

清姫「……………生徒会長。」

未来「はい。」

清姫「必ず、この人を幸せにしてあげてね。」

未来「ええ、この身に誓います。」

清姫先生は、嘘を嫌う。例え優しい嘘だとしても、先生は許しはしないだろう。つまり、僕には敵視していた。だけど、その真意を見せた途端、清姫先生の目は優しくなった。

清姫「それでは、お二方。お幸せに。」

そして、残ったのは未来先輩と、白野と僕だけになった。

未来「……………怖かった。」

ガルツチ「うん、こればかりは滅茶苦茶きつい罰にやられるかとヒヤヒヤしたよ。」

白野「そうね、んじゃあ私先に戻ってるね。」

未来ガル「うん。」

さて、後は僕と未来だけ……………だな。

未来「……………なあ、ガルツチ。」

ガルツチ「ん？何？」

未来「まだ、不安か？男同士のイチヤイチャが見られるのを……………」

ガルツチ「……………うん。」

未来「じゃあさ、しばらくここに居よう。」

ガルツチ「……………いいの？」

未来「うん。念のために、アルトリア先生にも伝えたからね。だから、ここでゆつくりしよう。」

ガルツチ「……………そうだね。んじゃあさ。」

未来「ん？」

ガルツチ「未来の胸元で、寝かせて。」

未来「いいよ。僕の鼓動を聞いて、放課後まで眠ってね。」

ガルツチ「うん……………」

今まで隠し通してきた激しすぎる鼓動は、未来の優しい鼓動によって落ち着かされ、今では夜の静けさのような鼓動に変わった。

今もなお、少しだけドキドキしているが、それでも押し殺していた頃より、ずっと静

かだった。

未来の鼓動は、まるで海の小波のように、優しく打っていた。

その鼓動を聞く度、僕は落ち着き、心地良くなっていく。この安らぎを、この優しさを、この心地良さを……………離したくない。

ガルツチ「ねえ、未来。」

未来「何？」

ガルツチ「……………心の底から、愛してるよ。」

未来「僕も、ガルツチの事、愛してるよ。」

一瞬、僕の心の奥底で、キュンとなった。

T H E   E N D